

だ。料亭をたたんだ戦後は、ラジオドラマの脚本家、演劇や邦楽の評論家として活動した。

二人は一時疎遠になるも、寺田の中学時代に家庭教師を通じて交友が復活、寺田、宮田、伊藤、佐分、青井東平⁷の5人が親友だったという。寺田が宮田を追想した文章には、「昭和二〔1927〕年の九月、彼は伊藤廉さんと二人でフランスへ留学した。その名古屋を離れるという前夜、折からの月が良いというので、彼と廉さん、それに杉浦冷石さん⁸を混えて四人、オールドパアかなんかと下物(さかな)を携へ、東築港の月下の草原で別れを惜んだことも忘れられない。」⁹とある。こうした別離と再会を繰り返しつつ、寺田の美術家との交遊範囲は宮田と伊藤の二人を介して広がっていったと考えられる。

岸田劉生門下であった洋画家・杉本健吉(1905-2004)が日本の古美術に触れるきつ



図3 青邨ゆかりの料紙箱、硯箱と寺田栄一氏

かけを作ったのも寺田である¹⁰。二人が何を機に出会ったかは定かでないが、1940年、寺田との奈良旅行で杉本は東大寺塔頭観音院の住職であった上司海雲と出会い、のちに彼を介して、美術史家で歌人、書家の会津ハル(1881-1956)や志賀直哉との交流が始まった。杉本に限らず、寺田は宮田の友人である林重義¹¹、益田義信¹²らとも戦時中たびたび奈良や京都の古社寺を巡り、食事や祇園を楽しんだことを綴っている¹³。同行者には文筆家、実業家の名前も多数登場するが、調査途上につき詳しい内容は別の機会に改めたい。

得月楼での出会いが交流のきっかけとなった美術家もいる。戦前の名古屋では、院展を巡回する折に松坂屋が展示会場となり、得月楼が晩餐会に用いられたというが、来店した中に岐阜出身の日本画家・前田青邨(1885-1977)がいた。

「わたしが、まだ、はたちになったばかりだから、大正十二〔1923〕年ごろだったろうか。なにかのことで、前田青邨さんを、わが家へお招きしたことがある。この席の違棚に、まだ桐の白木のまゝの、この料紙箱と硯箱とが飾ってあった。青邨さんは、座敷へ通るとすぐ、これに目をつけて、このこしらへが大へん気に入ったといい、これになにか描いてあげようかと言われた。わたくしは、二つ返事をお願いした。それから、六、七年……。自分でわざわざこれを持参してきて下さった。」¹⁴〔図3〕

同年、青邨は1年間にわたるヨーロッパでの泰西美術研究を終えて8月に帰国したばかり、9月1日に再興第10回院展の会場で関東大震災に遭遇、神奈川県鶴見の自宅兼アトリエも少なからぬ被害を受けた。名古屋滞在の

のがその対象になります。先日私用でスイスに旅行したのですが、その際20数年前の展覧会の記憶が鮮やかによみがえってきました。その展覧会とは開館10周年の記念として1998年に開催した「ピカソ展」です。140点の作品によってピカソの全体像を回顧したこの展覧会は、世界中の美術館や画廊、個人所蔵家から作品を借用して開催したものでしたが、その中で10点もの作品を出品していただいたのが、スイス、ルツェルン在住のアンジェラ・ローゼンガルト氏でした。同氏の父、ジークフリート氏がピカソと懇意だったこともあり、ローゼンガルト氏はスイスでも指折りのピカソのコレクターとして知られていましたが、展覧会の始まる1年半ほど前、ルツェルンの彼女の自宅を訪れ、出品を依頼しました。話し合いは1時間余り続いたのでしょうか。最後に彼女が「イエス」と言ってくれ、展覧会の実現に向けて大きく一步を踏み出すことができました。ピカソ展のための数多い交渉の中でも、最も印象に残った瞬間でした。

ピカソとクレールを中心とするローゼンガルト・コレクションは、その後2002年にルツェルン駅のすぐそばに美術館として公開され現在に至っています。今回その美術館を久しぶりに訪問し、かつて借用した懐かしい作品の数々と再会を果たしました。受付でローゼンガルト氏の近況を尋ねると、今年90歳になる彼女は今でも毎日美術館を訪れ、館内を見回るとのこと。残念ながら訪問時にはまだ美術館に姿はなく、再会することは叶いませんでしたが、健在ぶりを確認できただけでも十分でした。展覧会実現の過程で出会った多くの人々の記憶は、出品した作品と同じくらい、時にはそれ以上に、懐かしい思い出として主催者の心に残ります。(F)

ミュシャの展覧会は日本国内で頻繁に開催されて来ましたが、この地方では松坂屋美術館でも開催されていますので、ご覧になった方も多いかと思います。しかし、今回のミュシャ展は、それらの展覧会とは少し違う切り口でミュシャを語ってみようというものです。タイトルに「みんなのミュシャ ミュシャからマンガへ一線の魔術」とあるように、ミュシャのみならず、1960年代から現代にかけてミュシャから多大な影響を受けて創作をしたアーティストや漫画家の作品も展示し、時を超えて愛され続ける画家ミュシャの魅力を再認識しようというものです。「みんなのミュシャ」

正確な時期は調査中だが、落ち着いた制作場所を求めての一時疎開だった可能性はある。ご遺族による生前の寺田の話では、滞在した数か月、青邨は毎朝、料亭の板前と一緒に魚市場、青物市場へ出かけ、朝食前にエビや魚の全体を墨で線描きし、食後はそれを千切って部分描写していたという。料紙箱と硯箱に描かれた豌豆の花も、青物市場で目に留まった題材だろうか。

当館で2004年度に収蔵した亀山巖『名古屋豆本』のうち第29巻『荒川ふく小傳』(1972年5月発行)は、最晩年の寺田による唯一の著書である。名古屋に江戸小唄を植えた名妓・荒川ふく(1864-1937)が死後30年余りで忘れ去られようとしている状況を憂い、門人のひとりであった自分が記憶の限り書き残すと序文に記している。納屋橋界隈で多くの人が交流し、それをもてなす豊かな文化が育まれてきたことを当事者として、また理解者として長年見て来たからこそ、後世に残す意義を確信していたのだろう。

氏の活動の全容を紹介するには、調査も紙面も明らかに足りていない。裏付けとなる資料も未知数であるが、今後も地道に聞き取りや文献調査を続け、美術史上に表立って登場はしないものの、当地の文化芸術を陰で支えた人物の功績を明らかにしながら、多角的な視点をもって館の展示活動に反映させていきたい。(3)

*本文中では敬称を省略しています。ただし引用はこの限りではありません。

*本稿執筆ならびに図版掲載に際し、ご教示、ご協力を賜った関係者の方々へこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

- 1 店の設えの描写は、坪内逍遙と親交のあった市島春城「得月楼の追憶」『春城筆話』(1928年8月、早稲田大学出版部)に詳しい。
- 2 http://www.art-museum.city.nagoya.jp/publish/annual_report
- 3 「名古屋市美術館ニュース アートペーパー2005年夏

感想ノートから

カラヴァッジョ展

2019年10月26日(土)~12月15日(日)

昨年の8月に発行されたアートペーパー111号「展覧会 現在進行形」にて、「まさか名古屋美術館でカラヴァッジョ展が開催できるとは、それも晩年の傑作《ゴリアテの首を持つダヴィデ》が来日するなんて、個人的には未だに信じがたいです」と書きました。実際、ボルゲーゼ美術館から《ダヴィデ》が来日し、この美術館に展示された44日間は、たいへん貴重な、至福の時間となりました。ローマに渡航された経験のある方から、「ボルゲーゼの2大傑作《ゴリアテの首を持つダヴィデ》と《洗礼者聖ヨハネ》を並べて見られたので大満足です。ボルゲーゼは2時間制なのでこんなにゆっくり鑑賞できませんから…」という感想をいただいたのが嬉しいです。「特に、ダヴィデの絵と聖ヨハネの絵が一对になって展示してあったのが良かったです。殺す側と殺される側の暗示…最高!!」と、登場人物の運命の対比まで読み取られた方もいらっしゃいました。「ゴリアテの首がすごかったです。はいけいは、全部黒かったです」とは、小学5年生の感想。闇があるからこそ光が際立つ。ルネサンス時代の絵画との大きな

というタイトルは、美術展のタイトルとしては今までにない斬新なものと思われませんが、一世紀前においても現代においても愛されているミュシャを「みんなのミュシャ」と表現したものです。また、ミュシャは限られた人々のものとしての芸術ではなく、民衆にも手の届く芸術を創造しようとしていました。そのようなミュシャの考え方をよく表した言葉でもあります。

この展覧会は東京のBunkamuraザ・ミュージアムに始まり、京都、札幌、名古屋、静岡、松本と巡回します。この原稿を書いている現在は、京都で開催中ですが、各地

号(通巻66号、3面)を参照のこと。

- 4 岸田劉生《四時競甘》(1926年、紙本着彩、愛知県美術館蔵)あたりを参考にしたものか。
- 5 宮田重雄「故舊」『隨筆集 さんどり彙』(1949年2月、晩星出版社)p.153-155。寺田栄一「宮田重雄君追想」『CBCクラブ通信133号』(1971年10月、4面中3面)にも近似した記述が見られる。
CBCクラブは、中部日本放送が地域文化の向上、健全な放送の発達を図るとともに、文化人の相互の親睦を目的に組織した団体で、1957年に発足以来、現在も活動を継続している。会報誌である『CBCクラブ通信』は発足から2年後の1959年より発行が始まり、活動報告ほか会員の寄稿記事が中心。本稿に登場する人物のうち寺田、宮田、杉浦、杉本はいずれもクラブ創設当初からの会員。後に青井、亀山、伊藤も加わっている。
- 6 くぼた・まんたろう(1889-1963)。東京・浅草出身の俳人、小説家、劇作家。慶應義塾大学で永井荷風(1879-1959)や小山内に学び、岸田國士、岩田豊雄(=獅子文六)とともに文学座の創設に関わった。なお、宮田も寺田に少し遅れて久保田門下となり、晩年まで俳句に親しんでいる。
- 7 あおい・とうへい(1900?-1975)。宮田とは幼稚園からの付き合いで、名古屋医科大学(現・名古屋大学医学部)に学ぶ。画家・三岸好太郎が名古屋で客死した翌日、デスマスクをとったことで知られる。東区東片端で青井医院を開院。「名古屋大学医学部九十年史」の編集に携わった。
- 8 本名・杉浦端(たけし/1896-1977)。愛知県碧海郡西端村(現・碧南市)に生まれ、教職の後、新聞記者となり大阪朝日新聞、名古屋新聞社、大阪毎日新聞社などに勤務し、郷里に戻ってから文筆生活を送る。「ホトギス」、ねんげ句会同人。
- 9 註5、寺田と同じ。文中の()は原文ママ、[]内の情報は筆者の補記による。以下同じ。
- 10 木本文平「生きることは描くこと 生誕100年 杉本健吉物語」中日新聞2006年1月26日夕刊5面文化欄。2010年に同名書籍として求龍堂より刊行。
- 11 はやし・しげよし(1896-1944)／神戸市出身の洋画家。京都市絵画専門学校中退、関西美術院で鹿子木孟郎に師事。伊藤廉とともに、独立美術協会の創立会員の一人。
- 12 ますだ・よしのぶ(1905-1990)／東京出身の洋画家。慶應義塾大学卒業。梅原龍三郎に師事し、パリ留学後は国画家に所属。晩年まで宮田と親しく交流した。
- 13 註5、寺田と同じ。
- 14 寺田栄一「料紙箱と硯箱」『CBCクラブ通信81号』(1966年10月、4面中3面)。「図3」は同記事に掲載された写真を、発行者およびご遺族の許可を得て転載した。

違いです。

「カラヴァッジョを観にマルタ島へ行き、《聖ヨハネの斬首》を前にしたときの感動を思い出しました」という方もいらっしゃいます。講演会などで強調させていただいたのは、教会等に設置されているカラヴァッジョの大作は基本的に移動が不可能であり、また、そうした作品の多くは設置場所の状況(鑑賞者の視線や窓から光が射す方向など)を考慮して描かれている、ということでした。本展覧会でカラヴァッジョの凄味を実感された方は、ぜひローマをはじめとする「カラヴァッジョ巡礼」の旅に出ただき、現地でも味わえない、「今まさに事件が目の前で起こっているような」迫真性に触れてください。そして、ボルゲーゼ美術館でダヴィデ、ヨハネとの再会も果たしていただければと思います。(nori)



でそれぞれ会場の規模や空間が違っていますので、同じ作品を展示していても印象は大きく異なります。ミュシャが大好きな方は、名古屋会場はもちろんですが、機会があれば他の会場もご覧いただくと、また違う楽しみ方ができるのではないのでしょうか。

ミュシャが描く世界は、私たちが素直に「綺麗だなあ」と思えるものです。世の中にはいろいろな芸術作品がありますが、時にはこういった作品を気軽に楽しんでいただければと思います。(AN)

展覧会 現在進行形

「みんなのミュシャ ミュシャからマンガへ一線の魔術」展

2020年4月25日(土)~6月28日(日)

アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)は、チェコに生まれ、パリに出て活躍。しばしば「アール・ヌーヴォーの華」と呼ばれるように、典型的なアール・ヌーヴォーの画家として、流れるような曲線と装飾性を生かした華やかなグラフィック作品で知られています。

郷土の作家たち

〈中部学生写真連盟〉

1950(昭和25)年、東京で学生写真の全国組織が計画された。そのうちの一人、詫間喬夫は早稲田大学を卒業し、名古屋に帰ってきた。詫間を訪ね、組織を立ち上げるために実質的な活動を行ったのが、写真家・東松照明(1930-2012)であった。当時愛知大学の写真部に所属していた東松と齋藤良吉は、地元名古屋の各大学の写真部を訪ね歩き、1951(昭和26)年11月には〈中部学生写真連盟〉の結成へとこぎつけている。翌年開催された〈中部学生写真連盟〉のはじめての総会に於いて、東松は議長に選出されている。名古屋で始まった学生写真運動の機運は、1952(昭和27)年5月5日、〈全日本学生写真連盟〉の創設へとつながる。同年11月には東京上野の松坂屋で「第一回全日本学生写真連盟展」が開催されるが、同展は翌12月には名古屋・松坂屋に巡回している。このことは、学生写真連盟の組織化に於ける東松と名古屋の「位置」を示すものでもあった。1959(昭和34)年には、大学ばかりでなく、〈中部学生写真連盟〉高校の部も設けられた。

横断的なつながりを持った学生写真は、やがて運動体としての様相を呈していく。1954(昭和29)年に個人としてではなく共同制作という方法が重視され、1957(昭和32)年の

「全日本学生写真コンクール」には、「共同制作の部」が開設された。1960年代後半に入ると、その傾向はさらに推し進められ、社会的なテーマに写真部全体で取り組む「集団撮影行動」が主流となった。

さらに、1965(昭和40)年に〈全日本写真連盟〉がキャンペーン「状況1965」を開始、自らが於かれた社会の「状況」を批判的に捉え、表現することが推奨された。撮影会と合宿が行われ、合宿では作品の講評ばかりでなく、写真制作に対する姿勢までもが「総括」された。キャンペーンは、その後も展開され、1970年には公害キャンペーンが「提起」された。

そうしたなか、〈中部学生写真連盟〉では、大学と高校の表現に明らかな差異が生まれつつあった。キャンペーンに沿って、地域の歴史や環境、公害問題を集団撮影行動による「組み写真」で表現する大学生に対して、高校生の間では、クラスメートの肖像を撮影する、言わば「私写真」とも呼ぶべき表現へと移行していった。

匿名性と集団行動によって、「状況」を見つめ、問題を解き明かそうとした〈全日本学生写真連盟〉は、「政治の時代」の中で過激さを増し、一部の者は、やがて学生運動に収斂されていった。(J.T.)



「中部学生写真連盟機関誌(高校の部)」第4号(1964年12月発行)

・左の方が昔の画家で、右にいくにつれて新しくなっていることから、美術史の昔からさかのぼってその移り変わりを少女が眺めているようだと思います。フレームに収まっている絵画を美術館で鑑賞するというシーンを想起させられました。(理紗 22歳)

・A, B, Cと時代が移り変わっていく様子と見て取れ、それを表すものとして乗り物があり、身近なものとしての列車だったのかなと思う。(？ 31歳)

・美術史という流れを走り抜けていく列車の車窓から見える景色を目のあたりにして、作者自身は美術の歴史に果たして何を残すことができるのだろうか?…という思いが込められているように感じました。作家なりの、芸術に向き合う不安や覚悟を描いているのかなとも思いました。(カエル 48歳)

・スマホに最初は見えた。時代の移り変わってゆくのをスワイプして見てみたい。でもタイトルが車窓だった。けど似たようなものかとも思う。(おもち 22歳)

・ひとつひとつ風景が変わっていて、しかもただの景色ではないところがいいと思いました。一番右の絵は、この世界にはないものが描かれているので、一番気に入りました。(ここア 13歳)

・窓の外には絵が描かれていて、最後の晚餐だけは妙にインパクトがあった。正対して描くのではなく、遠近感をもって窓をあらわしているのはなぜなのか。作者の意図は?(希 65歳)

・正直、最初はスマホの画面かと思った。でも、じっと見てみると…ダヴィンチだ、絵だ、と思ったものの、なぜか白くぼやけている。そうか、「車窓」なのかとタイトルを見て気づく。謎の赤いセーラー服の少女。でも「車窓」ということは、動いているのね。そうすると、これは「絵」ではなくて、「そこ」にあった(ある)現実なのか…。「絵」を車窓から見ている少女を見ている私は、何者?(トリエンナーレン ?歳)

・1981年なんですけど、女の子がCGっぽくて、CGの女の子が見ているというよりは、CGの少女が見られているという感じがしました。左にいくにつれて赤くなっているのが、だんだん何かがちがっているみたいで、おもしろいです。(GIANIS! 12歳)

コメントのヴァリエーションが非常に充実していて、作品について私から説明を加える必要をまったく感じないほどでした。意見が多ければ多いほど、物事の見方の多様性が広がり、解釈は多面的に、豊かになっていきます。たった一つの正解があればよいわけではないのです。数量が示す説得力を実感し、みんなで作る楽しみというものを再確認した回でした。(haru)

萬代比佐志(まんだい ひさし/1897-1961)

萬代比佐志は、「愛美社」の同人である。愛美社は、大澤鉦一郎(おおさわせいいちろう/1893-1973)を中心とする年若い画家たちが1917(大正6)年に開催された草土社名古屋展覧会に触発されて結成した洋画研究グループで、1919(大正8)年に初回となる愛美社油絵素描展覧会を開催し、1921(大正10)年の第三回愛美社絵画展覧会の開催をもってグループとしての発表を終えている。

萬代は、現在の岡山東区に生まれている。父親が1907(明治40)年頃から1930(昭和5)年まで愛知県立第五中学校(現在の県立瑞陵高等学校)の物理教諭であり、萬代は1921(大正10)年に愛知県立工業学校(現在の県立愛知総合工科高等学校)図案科を卒業している。第三回愛美社絵画展覧会は卒業時の3月の開催であり、愛美社での活動が学業とともに行われていたことが分かる。また、同年10月、第三回帝国美術院展覧会(帝展)に《姉妹立像》が初入選している。その後、就職して大阪に転居し、1944(昭和19)年頃に帰名し、名古屋で死去した。

萬代の作品として現存が確認されているのは、名古屋市美術館が所蔵する《少女像》(挿図)のみである。この作品は、2007(平成19)年に刈谷市美術館で開催された「岸田劉生と愛美社の画家たち」展に出品された後、2008(平成20)年度に萬代の親族である所蔵者から寄贈していただいたものである。

「萬代」の読みは、一般に「ばんだい」とされている。帝展入選時に本人に取材した「新

愛知」の記事(1921年10月11日)には「ばんだい」とルビが付されている。萬代の兄である恒志(つねし/1891-1914)は、白馬会やフウザン会にも出品した画家で、時期はそれぞれに不明ながら、作家名として「ばんだい」と「まんだい」を共に使用していたようである。そのため機関施設により二つのいずれかの読みが採られている。萬代恒志の作品を所蔵する岡山東区美術館は、画面にある署名から「まんだい」としている。同じく「まんだい」とする岡山東区立図書館のご教示では、岡山東区美作市のあたりでは「まんだい」と読む家が多いとのことである。

恒志と比佐志の兄弟の家名の読みは「まんだい」である。比佐志も兄のように二つを用いていたことが考えられるが、今はそれを確かめる手立てがない。名古屋市美術館では、受贈時に所蔵者から教示のあった「まんだい」を本名ならびに作家名の苗字の読みとする。(み。)



萬代比佐志《少女像》1921年 名古屋市美術館蔵

イベントレビュー

サイエンス&アートフェスティバル「アート大会」

2019年11月2日(土)、3日(日・祝)

名古屋市美術館のある白川公園を「芸術と科学の杜」と称して、同じく白川公園内にある名古屋市科学館とともに周辺区域のみなさまと協力して地区の魅力を向上させようと2012年度にはじまった地域連携事業も、年号が令和となった今年度で8年目となりました。

サイエンス&アートフェスティバルは、その事業の1つとして文化の日の前後に白川公園一帯を会場にして主に屋外で実施している催しです。科学館では、「杜の駅@科学館」の名称で、大道芸などの行われる仮設舞台や屋台が設置され、縁日のような雰囲気が作られています。美術館は「アート大会」と題して、美術に科学の要素を取り入れたワークショップを実施しています。

アート大会では、美術作家や教育普及プログラムの専門家に講師となっただき、普段の美術館の活動ではなかなかできないことを行うようにしています。今年度は、広い空間の取れるグラウンドが別の目的のために使用できなかったため、美術館の敷地以外ではグラウンドの周縁の緑地部分を会場とすることになりました。講師となっただきなのは、名古屋工業大学大学院教授で環境造形を専門とする石松丈佳さん。準備と実施には、当館のボランティアとともに名古屋工業大学の環境とデザイン研究室のみなさんにもお手伝いいただきました。

白川公園には豊かな自然環境があります。長い年月によって育まれてきた樹木や季節ごとに植え替えられる花壇の植栽もあれば、噴水などの人工的な造形物もあり、更には公園の周辺を高層ビルや高速道路などの人工物が取り巻いています。こういった特色に気づき、白川公園を楽しんでいただくとともに、普段身の回りにも環境にも興味や関心を持っていただきたいと考えて、「アートと科学し、科学をアートするツアー」という名称で散策型のプログラムを行いました。スタッフとともにアクティビティを体験する「のんびりツアー」の参加者は黄色いユニフォームと落葉で作る色相環の首飾りを身に付けていました。

今年度は、他施設の催事と重なったためかフェスティバル全体の参加者が少なく、アート大会の参加者も見込みより少ない状況でした。その分、スタッフはゆったりと参加者に向き合うことができましたが、参加者には近隣にお住まいのリピーターの方も多く、自分なりの白川公園の楽しみ方を教えていただいたり、私たちの話に体験をもとにそうだよねと首肯していただいたりしました。噴水での虹の見方のレクチャーと楠の木(白川公園には楠の木が何本かある)の落ちた葉と実の採取は、思いのほか多くの方に喜ばれました。(み。)



イベントガイド

■特別展

みんなのミュシャ

ミュシャからマンガへ 線の魔術

会期: 2020年4月25日(土)~6月28日(日)

アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)の作品は、「線の魔術」ともいえる曲線美を特徴とし、多くの人に親しまれています。この展覧会ではミュシャの作品群はもちろんのこと、彼から影響を受けた後世のアーティストたちの作品を含めおよそ250点を展示します。

【関連催事】

○記念講演会

日時: 5月17日(日) 14:00~15:30

講師: 海野弘氏(評論家・作家)

○展覧会解説会

日時: 5月24日(日) 14:00~15:00

講師: 中村暁子(名古屋市美術館学芸員)

※いずれも2階講堂・無料・先着180名。

■常設展 名品コレクション展 I

会期: 2020年4月25日(土)~6月28日(日)

※名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介。

■コレクション解析学

日時: 6月14日(日) 午後2時から

演題: 「芥川賞作家の画業」

2階講堂・無料・先着180名・約30分

講師: 保崎裕徳(名古屋市美術館学芸係長)

作品: 富澤有為男《姉》1928年

休館日: 月曜日(祝休日の場合は開館し、翌平日休館)、展示替期間(4月1日~4月24日、6月29日~7月10日)(TT)

展評

2019年11月23日(土・祝)~2020年1月19日(日)
三重県立美術館

生誕120年・没後100年 関根正二展

明治から大正期を駆け抜けるように生きた画家・関根正二(1899-1919)の生誕120年・没後100年を記念した展覧会が三重県立美術館で開催された。関根は16歳で画壇にデビュー。しかし20歳と2カ月という若さで没している。わずか5年ほどの画家としての活動期間であったが、作品は観る者の心をとらえて離さない魅力を放ち続けている。このたびの展覧会は、作品約100点、手紙、はがきなどの資料約60点、伊東深水や河野通勢といった関連作家の作品・資料約50点で構成され、関根の魅力に迫る内容であった。

代表作の一点として知られる油彩画《三星》(図)は、亡くなる年の1919年に描かれた作品。手前には植物のようなものが描かれているが、ここは地上なのか、天上なのか。3人の人物のうち、中央は画家自身といわれる。横目による視線は強い意思を感じさせ、また神秘的でもある。このたびは人物画三部作と

もいわれる《井上郁像》(1917年)、《村岡みんの肖像》(同)、《真田吉之助夫妻像》(1918年)が展示されていた。人物の特徴と年齢を直視した写実表現で、透明感と生々しさを感じさせる描写が印象的である。今回まとまって人物画を見る機会を得て、あらためて関根が描く魂の光を映し出すような眼の描写に引き込まれた。

本展では、関根と親友村岡黒影との間で交わされたものをはじめ、書簡とはがきの展示が充実していた。書かれている内容とともに



関根正二《三星》1919年 東京国立近代美術館蔵

展評

2019年11月23日(土・祝)~2020年2月24日(日)
豊田市美術館

岡崎乾二郎 視覚のカイソウ 展

昨年末から年始にかけて、本格的な抽象絵画の展覧会を見ることができた。一つは東京ステーション・ギャラリーで開催されていた「坂田一男 捲土重来」展で、もうひとつが、その展覧会の企画監修に当たった造形作家の岡崎乾二郎の回顧展である。坂田一男(1889-1956)は、1921年に渡仏し、10年以上に亘って、パリでキュビズム以降の抽象絵画の実践を行い、1933年に帰国後は郷里岡岡で制作と後進の指導に当たった。1988年に倉敷で生誕100年を記念した大きな回顧展が開催され、再評価されたが、その後岡山県以外では展覧会は開催されず、今回が正しく待望の回顧展となった。展覧会では油彩画やグアッシュ等270点を越える作品を展示し、抽象画のコンポジションの成り立ちを詳しく知らしめる構成となっていた。なかでも驚いたのが、1944年に高潮により冠水し、絵の具が剥落した作品も展示、考察の対象に入れたことである。抽象絵画のコンポジションを重層的に読み取るその作業は、画家に対する最上の敬意さえ感じられ心地よかった。

抽象、それも日本近代の抽象画に向き合うその真摯な態度を見たからこそ、監修者・岡崎乾二郎の造形作家としての抽象作品を見たく、豊田市美術館を訪れた。同館では2017年に岡崎監修による展覧会「抽象の力」が開催

されているが、回顧展は始めて。1Fから3Fまで豊田市美術館全館にレリーフ、彫刻、ドローイング、絵画、さらにはタイルまで総数150点にも及ぶ作品が展示された。

なかでも「たてもののきもち」と題された1981年のはじめての個展で発表されたレリーフ群は、幾何学的抽象と色彩がもたらす多面的な空間を見せる愛すべき一群であった。

〈あかさかみつけ〉は、一枚の板から円や四角形の輪郭を切り抜き、折り曲げて、それぞれの面を塗り分けた作品。その八面体の構造体は、配色を替え、展示室の白い壁面に一列に設置される。折り曲げられ組み立てられた構造体を元一枚の平面に戻す仕組みを考えながら見ていると、単純な構造体に、色面によって区別された「自律した内部」が存在することに気付く。翻って考えると、アメリカのポスト・抽象表現主義の作家が、巨大な金属レリーフを制作し始めるより少し前に、岡崎はこのプロトタイプを制作していたことになる。また、鮮やかな色彩の筆致による対



photo: Shu Nakagawa
岡崎乾二郎《あかさかみつけ》1981年 高松市美術館蔵

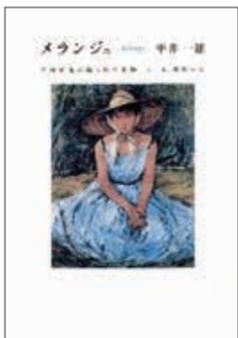
まずこうした経歴を概観する。展覧会図録や関連書籍も通読するが、それだけでは作家の人となりを掴むまでには至らない。もちろん、研究対象には私情を挟まず、あくまで客観的にとらえるよう努めるのだが、一方でその人物像をいきいきと感じたいという思いもある。例えばファン・ゴッホのように、大量の書簡が保存・公開されているケースは理想的だ。しかしそうした例は極めて稀であり、書簡や日記といったプライベートな資料へのアクセスも容易ではない。

本書の著者である平井一雄氏は、鬼頭鍋三郎を岳父にもつ法学者である。夫人が鬼頭の長女である縁で、本書をしたためたという。作家に近い親族が、家族だからこそ知りえた作家の一面を伝えることには、大きな意義がある。著者は、生前の鬼頭と個人的な付き合いはほとんどなきに等しい、と憤り深く語っているが、本書には家族による貴重な評伝のほか、教え子たちによる思い出話も収録されていて、制作に対する真摯な姿勢、生真面目な人柄をよく伝えている。親族によるこうした仕事は、学芸員の仕事とは別のフィールドで成り立っている。著者はまたもや謙虚に、「略年譜の域をどれだけ超えられたかは、はなはだ心もとない」というが、本書を読むことで鬼頭鍋三郎という作家の姿がいきいきと伝えられていくことを思うと、後々とても貴重な資料になりうると思うのである。(haru)

BOOK

『メランジュ 洋画家鬼頭鍋三郎の軌跡・続 書棚から』

(平井一雄著、静人舎、2019年)



鬼頭鍋三郎(1899-1982)は現在の名古屋市中千種区に生まれ、市立名古屋商業学校を卒業後、明治銀行に勤務したのち、画業を開始。ほぼ独学で美術を学び、1923年に松下春雄、中野安次郎らとともに美術研究グループ「サンサン」を結成した。光風会や日展を主な発表の場としてキャリアを重ね、1963年には日本芸術院会員、1968年からは愛知県立芸術大学教授を務めた。

作家について知ろうとすると、私たちは

筆跡からも書き手の性格や心情が伝わってきて、「夭折の画家」として悲劇的な側面が紹介されがちな関根の実像を知る上で、大変に興味深い展示であった。

このたびの20年ぶりの大規模な回顧展の開催までには、作品が新たに見つかり、2003年には《信仰の悲しみ》が重要文化財に指定さ

修復募金

《東山動物園猛獣画廊壁画》 修復のための募金をはじめました

第二次世界大戦中、猛獣処分の指示が下り、東山動物園ではヒグマやライオンなどの猛獣が殺され、また食糧不足や暖房不足によりその他の動物の飼育数が激減しました。「ゾウは猛獣じゃないから、絶対に危険はない。ゾウだけは、殺さないでほしい」という園長の嘆願や飼育係の努力があり、4頭いたインドゾウのうち2頭が生き延び、戦後ゾウに会うため日本各地の子どもたちが「ゾウ列車」に乗って来園した話はよく知られています。そのゾウ列車第1号が運行する約7か月前の1948年11月13日、東山動物園では、猛獣のいない寂しさを埋める「猛獣画廊」の開設式が挙行されていました。猛獣画廊は中京新聞社の提唱により実現したもので、当時飼育されていなかった世界の局地に棲む動物たちの姿を、当代一流の画家3名がそれぞれ1.4×5.4mの大きなキャンバスに描き、完成した3枚の絵画を主のいないカバ舎に壁画のごとく展示するというものでした。北極・南極を担当した太田三郎は2頭のシロクマを中心にホッキョクグズネやペンギンなどを描き、水谷清はトラやヒョウ、オランウータンなどが棲息する熱帯のジャングルを、宮本三郎はアフリカゾウやライオンなどが暮らすサバンナを描きました。壁画を見た子ども



水谷清《東山動物園猛獣画廊壁画 No. 2》1948年

CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

想像界の生きものたち

人魚は伝説や物語に登場する想像上の生きものですが、20年以上前、私は香川県の金刀比羅宮で奉納されたという「人魚のミイラ」を見たことがあります。「人魚は実在しない」と分かっている、目の前のミイラの不気味な存在感は強い印象を残しました。そんな鮮烈な記憶もあり、国立民族学博物館(大阪府吹田市)で開催された「驚異と怪異 想像界の生きものたち」(会期:2019年8月29日~11月26日)を興味深く見てきました。

展覧会では、さまざまな文化における人魚、龍、天馬、巨人、有角人など、想像の世界の生きものが紹介されていました。図録内にて「人の脳が未知のものを想像するには、見たことのある部品をなんとか駆使して心像を描くしかない」と説明されるように、人は自然界の生きものを組み合わせてこうした生きものを思い描いてきました。人魚は上半身が女性、下半身が魚というイメージが多く見られますが、その描かれた姿たちは文化によって多様で、造形としても面白味を覚えるものでした。

会場には、オランダのライデン国立民族学博物館から“里帰り”した日本の「人魚のミイ

れた。時代の経過とともに研究は発展し、近代美術史上での評価は築かれてきた一方、関根が生きた時代は遠のいていく。今年当館で展示した岸田劉生も同じく、美術館では明治・大正の作家を次の世代に引き継いでいくために、どのように紹介していくかを考えていかなければならない時がきていると感じた。(I.)

ちは珍しい動物たちの姿に興味津々で、大人たちはライオンやトラを見て昔の動物園を懐かしんだと中京新聞に報じられています。

動物の飼育数が回復するにしたがって、猛獣画廊は役目を終えたとみられますが、閉廊の日付はわかっていません。当館は1997年にこの壁画を収蔵しましたが、傷みが激しかったことから永らく展示は控えてきました。当館での初公開は2018年の開館30周年記念特別展「ザ・ベスト・セレクション」で、これまでの作品収集の歩みを振り返る中で、修復は必要ながらもなんとか残すことのできた貴重な文化財の例であると考え、本作品を展示しました。幸いにも壁画の由来や迫力に関心を持たれたご来場の方々が多かったようで、「動物園の絵の歴史的背景は後世に伝えていくべき」、「ぜひ修復して残してほしい」というお声をいただきました。

これを機に、以前から募集している寄附金の使途をこの壁画の修復に絞り、当面「東山動物園猛獣画廊壁画修復募金」として皆様のご協力をお願いすることにしました。寄附の方法等の詳細は当館公式サイト、または館内配布の「ゆめ プレミアムアートコレクション寄附金事業」リーフレットをご覧ください。どうぞご支援くださいますようお願い申し上げます。(nori)

ラ」が展示されていました。その不気味さと「リアルさ」は衝撃的でした。19世紀の半ば、欧米で人魚のミイラが一世を風靡したことがあり、それは、長崎の出島にいたオランダ商人が購入し持ち帰ったと言います。日本では当時「人魚を見ると厄除けになる」という言い伝えがあり、「人魚の干物」は見世物の出し物となっていました。それはサルと魚を合わせたもので、オランダ人は作り物であることがわかっていたようですが、あまりの出来栄に求めたそうです。

こうした「生きもの」は、人が自然を恐れ、敬い、生存するために養ってきた知恵から生まれ、想像力・創造力を豊かにし、時に啓蒙し、時に商売の種になり、文化の多様性を生み出してきたと言えるでしょう。そして、時代とともに科学的に存在を明らかにできない「生きもの」は、実世界から追い出されてきました。しかし「人魚はいるかもしれない」「あれは河童かもしれない」と想像することは、人を川や海といった自然の力に対して謙虚にし、先人たちの感性の豊かさや知恵の深さを知ることができるように思えます。そして、ちょっと楽しく生きることができるようにも思えます。(I.)

【参考文献】
国立民族学博物館監修『驚異と怪異 想像界の生きものたち』(2019) 河出書房新社

【編集後記】

アートペーパー113号をお届けします。

私は今回初めて「編集」という仕事に携わりました。無事にアートペーパーができあがるかどうか、ときどきわくわくしながらこの編集後記を書いています。

執筆者のみなさんからメールで原稿データが届くと、私は最初の読者として内容を読むのですが、その瞬間がとても面白いのです。原稿データをパソコン画面で開いた瞬間に、まるで焼ききたのパンのような“ホカホカとした湯気”が文章から立ちのぼって見えるように感じるからです。書き手の情熱や、生まれたての言葉たちが持つエネルギーが伝わってくるのでしょうか。この“実際に目に見えるわけではないけれど、見えるように感じる”という心の動きが、とても不思議で面白いなと思います。

できたてホカホカのアートペーパー113号を、春風の中で読者のみなさまが楽しそうに読んでくださる姿が、なんだか見える気がするよな…(TH)

アートペーパー第113号 発行日:2020年4月1日

発行 名古屋美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日:毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)
年末年始
開館時間:午前9時30分~午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

Nagoya City Art Museum